

氏名	石塚 諭		
専攻分野の名称	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 429 号		
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 1 5 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士		
学位論文名	体育授業における教師の意思決定と事前計画に関する研究		
論文審査委員	(主査)	教授 梅澤 秋久	
	(副査)	教授 奥住 秀之	教授 小宮山 伴与志
		教授 伊藤 信之	教授 物部 博文

学位論文要旨

本研究では、体育授業における教師行動を意思決定していく即時的な思考と事前計画との関連から、教師の実践的知識の在り方を明らかにすることを目的とした。

第 1 章では、授業中の教師が意思決定に至る思考プロセスの特徴を明らかにするために、体育授業において、教師が学習者行動をどのように解釈し、行為の中の省察（reflection in action）として意思決定を遂行しているかということを検討した。その結果、授業中の教師の思考は、「観察規準準拠型思考プロセス」「観察規準生成型思考プロセス」「相互作用規準準拠型思考プロセス」「相互作用規準生成型思考プロセス」の 4 つの特徴を有していることが見出された。本研究では、教師が、複数の思考プロセスを駆使し、状況に応じた意思決定をくり返し学習者を解釈しながら授業を構成していくということが確認された。特に、「規準」を生成していく思考プロセスにおいて、教師が事前に有している規準を基軸に、学習者をどのように解釈するかということをくり返し、その後の教師行動を意思決定する姿が見出された。これらは、数的な指標や割合では示すことができなかった内容といえる。また、具体的に「規準」が指す内容は、あらかじめ教師が想定する学習者の動きや反応、評価の指標であり、事前に想定する「事前計画」と捉えることができる。

そこで、第 2 章では、教師が、事前計画をどのような存在として捉えているかということを検討した。中堅期の小学校教師を対象に半構造化インタビューからデータを収集し、質的内容分析法の手法を用いて事前計画に対する意識を分析した。その結果、小学校教師は「授業を進行する進行者としての教師」「学習内容を指導していく指導者としての教師」「事前計画を活用する利用者としての教師」の三つの立場から事前計画を意識していることが見出された。第 1 章の結果を踏まえると、授業中の教師の意思決定を方向付ける「規準」は、この三つ立場から生成されているということが示唆された。

第 3 章では、第 2 章の結果をもとに作成した質問紙を用いた量的な手法により、教師の事前計画に対する意識構造を明らかにすることを目的とした。質問紙調査の結果、体育の事前計画に対する教師の意識構造は、「学びと指導と評価の一体化」「学びの状況に応じた即興的な思考」

「計画立案における関係者との相談」「学習者の見通し」の4因子で構成されていることが確認された。

教師は、事前計画を作成することを「指導と評価」に子どもの学びを加えた「学びと指導と評価の一体化」として意識していると考えられる。この意識は、今後の学習観に必要な考えといえ、教師の資質・能力を示したものであると考えられる。特に中堅期の教師は、「子どもの学び」を重視し、さらに初任期と中堅期の教師は「大まかな内容」を基軸に柔軟な指導を心がけていることが推測された。これらの意識は、第2章で明らかにした「学習内容を指導する指導者としての教師」から生成された意識と考えることができる。また、「学びの状況に応じた即興的な思考」は、先行研究において熟練者の特徴とされているが、事前計画の段階では、初任期の教師も中堅期やベテラン期の教師と同様に即興的な思考の必要性を意識している可能性が示された。さらに「学習者の見通し」は、主体的な学習として重視されている自己調整学習に関連した内容であったことから、教師は、事前計画を学習者の「学び」と関連づけて意識していると考えられる。「計画立案における関係者との相談」では、相談の対象が、体育専門の教師や同僚に加え、学習者を含むなど多岐にわたっていることが特徴であった。これは、第2章で示した「事前計画を活用する利用者としての教師」から生成される意識であると考えられる。特に初任期の教師は、関係者から学ぶ意欲が高く、とりわけ、体育専門の教師から指示や助言を求める意識が高い可能性が確認された。このような意識構造が、初任期の教師の成長を支え、協働することで実践的知識を生成していく基盤をつくっていく可能性が示された。

以上のように、教師の意思決定と事前計画の関連を捉えると、事前計画に対する教師の意識構造は、授業中の即時的な意思決定における判断過程の基盤ともいえ、実践的知識の一部を構成していると考えられる。その基盤は、学習者や同僚を含めたチームとして事前計画を共有する意識であり、今後の学習観に求められる意識を存立させているものと考えられる。

本研究の成果は、教師が事前計画をどのように意識すべきかという教師の発達段階に応じた事前計画の持ち方を考える視点にもなり得、今後も実践的知識の在り方を考えていくための知見を提示したものである。